

『竹内好セレクション I・II』第一刷（二〇〇六年十二月五日発行）正誤表

【注】上から順に位置（巻、頁、行）、内容（誤↓正）を示す。

なお、初出照合など筑摩書房版全集そのものの検討は部分的にしか行っていません。

I 二〇 12行目（13行目との間に1行アキ）

I 二四 15行目（16行目との間に1行アキ）

I 四二 6行目 自らの内を非凡の体験を ↓ 自らの内に非凡の体験を

I 四二 14行目 決意を胸に描いた ↓ 決意を胸に描いた

I 四三 5行目 人を証すも ↓ 人を証すも

I 五〇 4行目 退くことと、 ↓ 退くこと、

I 五〇 10行目 容体として在る ↓ 容体として在る

I 五四 9行目 大東亜地域 ↓ 大東亜諸地域

I 五九 2行目 生み出されるべきもの ↓ 生み出さるべきもの

I 六〇 17行目 であろうか、受け ↓ であろうか。受け

- I 六一 5行目 由々しいものと↓由々しいものに
- I 七三 8行目 反共産主義者↓反共主義者
- I 八三 13行目 「あれは超克派だ」とか、の後にヌケ)「あれは超克派に近い」とか
- I 八七 16行目 論難攻撃され↓論難攻撃され
- I 九八 7行目 一つの符合↓一つの符牒
- I 一一〇 3行目 知識さえもが↓知識人さえもが
- I 一二八 10行目 (11行目との間に1行アキ) *
- I 一二九 13行目 (14行目との間に1行アキ、*からココまで2字下ゲ)
- I 一二九 14行目 (行頭1字下ゲ)
- I 一六一 14行目 日本よりひどい)したがって↓日本よりひどい)、したがって
- I 一七〇 2行目 (3行目から追イ込ミ)
- I 一八〇 4行目 度合いだけ↓度合だけ
- I 一九一 14行目 日本の近代主義↓日本の近代社会
- I 一九八 6行目 (言語学者、の後にヌケ)や、民俗学者
- I 二〇〇 5行目 この国民にふれて↓この問題にふれて
- I 二〇六 14行目 戦いを避けたいために↓戦いを避けたために
- I 二〇九 8行目 (するわけである。の後に段落改行入レル)
- I 二一七 8行目 (9行目から追イ込ミ)

- I 二五九 15行目 (ことではない。の後に段落改行入レル)
- I 三二六 14行目 議會を否定する ↓ 議會を否認する
- II 四二 4行目 — 何も ↓ — まず、何も
- II 四九 2行目 『月報』雑誌化する ↓ 『月報』、雑誌化する
- II 六〇 8行目 夕食を ↓ 夕飯を
- II 七九 1行目 そのことによつて生前 ↓ そのことによつて、生前
- II 八二 15行目 宗教的であつた。と ↓ 宗教的であつた、と
- II 九一 12行目 笑われるべきである ↓ 笑われるべきである
- II 九二 17行目 以下に連なる ↓ 以下に連る
- II 九三 2行目 『南腔北調書』 ↓ 『南腔北調集』
- II 九五 5行目 設定した ↓ 設定された
- II 一〇三 17行目 結論を設けて ↓ 結構を設けて
- II 一一六 12行目 覚書き ↓ 覚書
- II 一三七 8行目 影響であつて今日から ↓ 影響であつて、今日から
- II 一四六 4行目 憎む勘定が ↓ 憎む感情が
- II 一五一 1行目 主観的に ↓ 主題的に
- II 一五二 17行目 胡兆民先生追悼会 ↓ 故兆民先生追悼会
- II 一五五 (見出しの後) 4行目 一九四〇年出版 ↓ 一九四〇年の出版

- II 一八六 17行目 根本の命題ひとつが ↓ 根本の命題のひとつが
- II 一八八 6行目 眺められたものは ↓ 眺められたのは
- II 一九一 5行目 むしろ敗北という事実 ↓ むしろ敗北は、敗北という事実
- II 一九四 1行目 真実の概念でない ↓ 真実の観念でない
- II 二三四 17行目 譲歩をもって ↓ 譲歩をもってし
- II 二四四 6行目 ヒュウマニスト ↓ ヒューマニスト
- II 二四四 10行目 暴力を固定的なものに ↓ 暴力を固定的な質的なものに
- II 二四五 16行目 反共産主義者 ↓ 反共主義者
- II 二五五 11行目 熟語にも見られ ↓ 熟語に見られ
- II 二六三 4行目 思想が測れる ↓ 思想が測られる
- II 二七二 6行目 日露戦争までの日本 ↓ 日清戦争までの日本
- II 二七七 16行目 閔氏一族が ↓ 閔氏一派が
- II 二八〇 (小見出しの後) 2行目 実績は ↓ 実績は
- II 二八七 17行目 苦心の状態像に ↓ 苦心の状態像に
- II 三〇〇 16行目 燃やしてしまった ↓ 燃やしてしまった
- II 三〇二 8行目 三か月 ↓ 三ヵ月
- II 三〇二 13行目 (行頭字下げナシ)
- II 三二三 3行目 同じ年に ↓ おなじ年に

- II 三一九 13行目 徐徐として ↓ 徐々として
- II 三四八 6行目 真理追求の ↓ 真理追求の
- II 三七八 6行目 日本側はすでに ↓ 日本側は、すでに

【解題】

近年の竹内好再評価の機運の盛り上がりは喜ばしい。しかし、そこに忍び込んだ神話化の企てには注意が必要である。なぜなら、神話化もまた思想の改竄、篡奪のひとつのやり口だからである。天より高く持ち上げる能書きで包んでおきながら、その裏で改竄し、歪曲する。欧米思想家たちの著作を日本に輸入してメシの種にしている翻訳文筆業者の手口がそうである。

どこかでだれかが暴君の臣民は暴君より狂暴だと指摘していたが、DTPとブログに象徴される一億総表現者の時代（◎『週刊ダイヤモンド』の編集者の無責任で無力なドレイぶりもなかなかのものである。『竹内好セレクション』の出版企画はともよい（これについて私は『東方』二〇〇七年四月号に敬意を込めて書評を書いた）。しかし、この誤植の山はいつたい何だ！ これで『売り物』だというのだから開いた口がふさがらない。

各巻の目次裏に記された「本書は、『竹内好全集』（全一七巻、一九八〇〜八二年、筑摩書房刊行）を底本としたものである。明らかな誤植などは訂正を加え、それ以外の表記はすべて底本に

従った」との文言が哀しい。さながら出版界における「あるある大事典」問題、耐震強度の偽装問題のようである（公共広告機構へ訴えようかしらん）。

誤字脱字一覧から何を知ることができるか。その基本的で特徴的な事実はどこにあるか。私の尊敬するある技術史家は「労働の生産性は労働者の巧妙さに依存するばかりでなく、彼の道具の完全さにも依存する」とし、「生産手段が労働過程において過去の労働の生産物としてのその性格を主張するとすれば、それは、その生産手段の欠陥のせいである。……優秀な生産物にあつては、過去の労働によつての、その生産物の使用上の諸属性の媒介が消えうせている」と指摘している。

文字入力は、活版から写植の時代にはプロフェッショナルの職人の仕事であつた。DTPの時代には道具がある程度「解放」されたことによつて大量の素人が参入した。野村保恵は『誤記プリゴロゴロ 校正の常識・非常識』（日本エディタースクール出版部、二〇〇五年）でパソコン入力の誤植例（読みを誤つた例、ローマ字入力ミス、変換ミス）、OCR（光学式文字読取装置）の誤植例を二十数年にわたつて採取し、整理して、巻末三十一ページに載せている。

今回の誤植を検討すると、勘定↓感情、追究↓追求、などのごく少数を除くほとんどが、入力における漢字変換ミスやOCRの読み取り不良に起因するものではないことに特徴がある。近代主義↓近代社会、南腔北調書↓南腔北調集、日露戦争↓日清戦争、などが典型である。それは入力におけるミスではあるが、「生産手段の欠陥」による変換ミスではない。写植の職人は採字にあつては内容を読んではいけないと教えられた。日露戦争↓日清戦争というミスは思い込みによる先走つた入力である。質と量から判断すると、入力者はかなりレベルが低く、専門の入力業者

による入力ではないだろう。

編著者、編集者は、本文をほとんど読んでいなかったのではないか。引き合わせ校正も素読み校正もなされなかったのではないか(のだと推測できる)。仕事をなめているとしか思えない。こうして、編著者や編集者の仕事はそのまま印刷所に押し付けられた(のだと推測できる)。

DTPの普及によって執筆者の層が厚くなったことは好ましいことである。しかし、今回のように、校訂を経て公刊された全集(筑摩書房版)を底本にした出版の場合、元「原稿」の信頼性についての点検、原稿の整理という仕事は第一段階を終えたものと捉えてよい。しかも原稿は手書きでなく印刷文字である。結果、編集と校正の仕事の大部分は、底本との引き合わせと素読みという作業となる。ここで職業的校正者にその作業を発注せずに「コスト」を切り詰めようとした(のだと推測できる)。

コンピュータが発達しようとも、決定的な要素は人間である。モノが人を使うのではなく、人がモノを使うのである。誤った「コスト」意識は、職業としての編集や校正を減ぼしていく。編集者のドレイ根性は自らの存在を不要なものにしていく。たとえ編集者が読めなかったとしても、プロフェッショナルとしての校正者に任せればよいではないか。それもしないで本が世に出ていくわけである。出版された文面に信がおけなくなってしまう読者は図書館へ行って逐一、底本と引き合わせよ、というのであろうか。たまったものではない。家電や自動車なら欠陥商品はリコールするのが商道德である。出版の世界では消費者(読者)は無権利状態のまま、泣き寝入り強いられている。不当きわまりない。

文筆ヤクザたちは、引用するときには都合のいいところだけを抜き出して利用する。歴史の文脈などおかまいなしだ。復刻、再製するときには誤字脱字は見過ごして平気だ。この人たちによる竹内好再評価とはそのようなものなのである。ハゲタカにも劣る。

注一 K.Mary/F.Engels "Das Kapital", 1867/94. (長谷部文雄訳) 第十二章第三節

注二 同 第五章第一節